

本朝繪画考

卷

多  
1341





門多  
1341  
卷

日九十月  
永  
十四



本朝繪画考

故飯島虚心遺稿

山口物外校補綴訂

赤繪

赤繪

赤繪指南天保年間  
板推舟作二凡赤繪を誓古せんと木もハハ先つ

調合の薬の繪の具をよくにうぼうにて摺り極細末にし

て其後つおき薬を入れてつかひよくして書くへし絵に

ても字にて七筆尖瀬戸物へあたらずた、繪の具を筆の





本朝繪画考

故飯島虚心遺稿

山口物外補綴

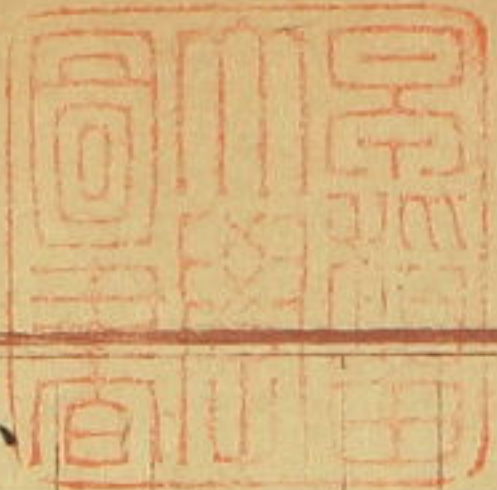
赤繪

赤繪指南天保年間  
板橋舟二凡赤繪を誓古せんと木もハハ先つ

調合の薬の繪の具をよくにうぼうにて摺り極細末にし

て其後つおき薬を入れてつかひよくして書くへし絵に

ても字にて七筆尖瀬戸物へあたらすた、繪の具を筆の



Handwritten note on a small slip of paper at the top center.



先にて引きてゆくやうにのけはきれいにかけるなり最  
細きはとみごとなり左ニ載せたる繪の具の製法の圖を  
みてあしうへし

黒藥製す法ハ 蒼藥 紺青藥 黄藥 光澤置揚藥

光澤無置藥 赤藥 草藥 大志や藥 金箔

此の諸藥の繪の具にて諸物を書きさて釜ニ入れ焼付る  
なり

按ずるに赤繪ハ諸の藥繪具をもて花鳥山水ふとを磁

器に書き焼付たるものをいふ文化文政の頃酒杯お  
よび爛德利湯合など画くおと大小行ハれかの勝川  
春英の門人春扇おとハ二代春好と号してより専此赤  
繪を画くおとを紫とせり近來海外輸出の陶器おれ  
を画き紫とするもの日に多し

大工籬形画



按ずるに大工雛形画ハ別ニ画法ありて自一専門家の  
業たり古昔ハあふらる此の画の名手ありしからん今  
宝曆頃より世に聞えたる画工を挙ぐれハ鈴木重春廣  
丹晨又木暮甚七立川小兵衛廣岡保教奴長兵衛後藤茂  
右衛門の類なり立川小兵衛一書を著ハ其大和繪様と  
いふ中に運筆の法を載せて詳なり其の法甚奇なれハ  
左ニ録す

繪様をおさんと思ひ先運筆を習ふへし運筆精し

らされハ百尺丈分寸大小の繪様そをばらす此筆法熟  
しとのふをもて繪様備ふと知るへし去る時ハ運  
筆ハ規矩ふして好む所速ふりそみやふれハ体法既  
小去る然らざる時ハ筆意委しからるして繪の格度  
を失ふ事あれハあり固て初心のためあゝにあらハす  
左の図一点つゝはあれたるは運筆なり連続の図ハ次  
二一二三の合印をもて知らしむ



羽子板繪

嬉遊笑覽ニ 羽子板の大きさの古 下学集ニ文安元年羽子

板正月用之と出たり年中定例記 出座所殿の頃の年中行事

正月十一日の條比丘尼御所の御参云々御所へ御みや

けハ大きいた大きの太句具已下云々 略さて田舎のはた

板處々かて小異ありといへとも殿さまかみさまを画け

るハ奥州三春かて作れりも同じ信濃は六板ハ夫婦の躰

けかりかて子供かといふし内裏羽子板といふ此繪ある

にふり一代男には六板の画も支婦子あるをうらやみ云

云

按に骨董集に羽子板の事を載せてあはと画の古とを

言ハされハかゝに用あし現今東京かて行ハるゝ羽子

板ハ役者似顔木より美人の姿かとを錦画に志たるも

のありかれを押画といふハ誤なり蓋しもと板木にて

摺りたる美人画なるとを貼り付け押画にしたるを賣り



たふ後ハ錦画といたるをも指して押画といひた  
がへたるなるを

加留多画

加留多又骨牌橋珉江ハ職人部類ニ阿蘭陀人おれを玩ぶ  
寛永の頃崎陽の人民做て戯れとせり其製古今同しから  
す今玩ぶ所の製ハ外黒くして内白かり画く所青色也

と云赤色 甲須とハふ圓形 旅 留といひ半円 骨板といふ四

品各十二共ニ四十八枚なり則其ハ虫の形豆半と云ニ

より九ニ至るまで其數目を画く十ハ僧形十一ハ騎馬十

二ハ武將ふり又加字半半須半ふといふありとへて南蛮

國のおとハなり

按ふ加留多ハ昔ハ專京師にて製造せり百人一首三十

六歌仙の類の加留多なり其の画風ハ土佐の末流とい

て仕入画おれと中ハ筆彩色をふして美麗おる也



り加留多ハ蓋し西班牙の語あるへし白河燕談ニ繪圖  
を加留多といふといひ春溪浪話ニ加留多ハ輕板とい  
ふ語の略なりといひ一説ニ加留多ハ厚き紙の義あり  
又一説ハ地名なりといふ詳ならず浮世物語卷一ニ  
何の頃よりハ南蛮より加留多といへる物を渡し一  
リ十二に至る四組ニおして勝負を決す云々とあり西  
洋より傳來せしおとハ疑ふあるへし支那にてハ早く  
骨牌あり即今いふ加留多の類ありて象牙をもて作り

たるものなり我國加留多の最古きはウンスン加留多  
天正加留多の類ありウンスン加留多ハ七十五枚より  
て天正加留多ハ四十八枚あり極上仕入の裏ハ二字あり金入  
とりにて天正加留多歌加留多花加留多の類ハみふ此の天  
正加留多より出たるものにして寛永前後に始まる  
へし



烏羽繪

寛濶平家物語宝永七ニ近き頃烏羽繪といふ物扇服紗

はやり出てぬるをみれば顔形手足人間にあらす化物畫

しに似たる

画品筆鋒補遺高平保法五年春板トニ近頃より烏羽繪と名つけ

狂画を專よするあり古の僧正よるものり畜獸禽鳥ハ

風流おらすた、人物のゝ異形なり手足の長短小眼大口

人跡をのそき風流をとおと、を誠ニ五月雨のつれ／＼秋

の夜のともしとあるへき物ハおれおんまさと覺ゆ

古画備考ニ佐野金藏京任近年流行の烏羽繪此もの書き

始むる所あり昌人運

浮世繪類考別本有藤月岑氏書入ニ烏羽繪ハ法眼周卜の

名画苑ニ載する所の皇都山人全暇の筆意ニ始るゝ近年

廢れたり

嬉遊笑覽ニ烏羽繪ハ春卜の画き出したる戲画よて画本

手鑑ニ出たりおれを烏羽繪といひしより僧正の名を



小児までも稱ふと、あれり春とり鳥羽絵の内、檜木  
に羽生ひて飛ぶの図あり、あれハ古き諺、や、筑波集に  
天狗ももふれ、るはねの生ぬらんくらまの寺に古きす  
里、木成安、埋草ニト養落髮千句あり、其中に枕にして  
も、ならぬをり、亦、有明ハ羽のはへてや飛ぬらん、或、雜記  
ニ攝、別、茶、臼、山に居られし天桂和尚へ誰人リ、摺木ニ羽の  
生ひたる画讚を乞ひけれハ、をり、亦、羽のはへたる絵  
あり、之つ世に真身の人ハ、よくふし、春とり一時の頓筆備  
を、あしてより此風流行して、その後、絵本多く出つ

按、鳥羽繪の始、詳ならず、蓋し、真享元録の項、の始、あり  
へし、されと、其のかき始、のハ、何人、あり、を、知らず、嬉遊  
笑覽ニ、法眼春、の、画、き、いたしたる由、いへと、誤あり、春  
ト、の、著、ハ、せし、画、品、筆、鋒、補、遺、の、鳥、羽、繪、の、下、に、著、せし  
一條をみて、著るへし、古画備考ニ、佐野金藏といふもの  
かき始むといひ、又、齊藤月岑ハ、皇都山人全暇の筆意ニ  
始まるかといふ、共ニ、詳ならず、此の全暇ハ、逸人画史ニ



赤猫齋平安の人名ハ全暇画法光琳を宗とし又自己の

狂画絶妙なりとありて俗稱を詳とせす或ハ古画備考

又載せたる佐野金藏の事ハ葦葎堂雜録ニ狂画師耳鳥

齋ハ浪花の産ニて京町堀三丁目ニ住シ俗稱松屋平三

郎といふ其始酒造家なりシハ後骨董舗を業とし狂画

を得て世ニ名高シ就中俳優角抵の姿を画くニあらぬ

様をうつせとし其情態をよく摸シて頗雅致あり又滑

稽の才ありて戲作をしおせり義太夫の道外淨瑠璃ニ

達シ松平と稱せらる浪花一崎の人物といふハ一と六

れまた佐野金藏の顔ハ獨考ふヘシ余近頃を鳥育り可書

上名のハ役詳者ハ身されりとし吾叙ハ筆を絵の事ハ素人ハふりりも二里三

寺間ハ鳥羽字僧正の頭中賦のまゆのりさ頬のさふやの笠木翁のハ意ハ二者

れハ一事とふ所又ハあハす写たり耳とくりニ名付てみ浪の端ニ書ハ

鳥画并酒中九度ハ初冬耳

又按ニ室永以素鳥羽絵世ニ行ハれ鳥羽絵車鳥羽絵ニ

國志扇の的あくび留ふとの絵本を刊行シ又豊廣北齋



ふと張文画より多く鳥羽絵をかきて自浮世絵師の一筆  
たり勝川春英最鳥羽絵に長く終に一種の狂画をかき  
出たせり世に九徳凡といふ近世の河鍋曉齋の狂画ハ  
おれより鳥羽絵の類なり

繪詞

好古小録に吉備公入唐絵詞二巻今下部集逸画  
伴大納言

繪詞姓名卷画者 北野天満宮絵詞四巻 上宮太子絵詞

證空絵詞伊弉余朝臣一巻画法眼慶々數詞證光の明峯寺殿十世尊草

の云々數行從行三任行朝臣智光病ハ 眞如堂絵詞三巻画掃上部

及外簽内大臣法務前大僧正公卿入道尊鎮親王下

圓光大師繪詞書四當十時八公卷画集光信 親鸞上人繪詞傳二巻名画

不詳書後醒  
齋帝宸筆

画図品類二時秋繪詞一巻画光長詞 多武峰縁記繪詞土画

外佐題光近信術詞基一糸禪閣 當麻寺繪詞傳内画府實佐隆光茂詞道遙院



太秦牛祭繪詞一卷 安良比花繪詞一卷 詞画三士位佐雅光長

壬生寺縁起繪詞一卷 上宮太子繪詞五卷 画住吉内

惠心僧都繪詞 諏訪明神詞三卷

本朝画図品目二字佐八幡繪詞三卷 宝治 中治 四條道場遊行

繪詞 画越前守光行 市姫道場繪詞 画者不行傳 浄阿上

人繪詞三卷 画者不行傳 尊應准后詞

按子繪詞ハ訓ミテクハイニ繪をかきて其の間小詞を

書き入れたるものふれハハふ絵詞の甚古けれと今此

の稀なり

繪職

嬉遊笑覽ニ繪職 懐子 五月職 門也又立衆由へき紙

のぼり正対 其外紙のふりといふ句多し寛永頃ハ端午の

ぼり皆紙ありてありしより羅山文集慶安辛卯五月端午云

云家々挿蒲造粽且為童兒立紙幡木曾また一代女五月の



處のぼりハ紙をつぎて素人繪をたのむ云々五元集拾遺  
ふよ竹の末葉のふして紙のざり今も田舎ハこれを用  
ち又五元集小卯月十七日或人の愛子ふねたり申されて  
郭公懺そめふとそ、めけりと云もあれハ此頃下さまふ  
ても布のざり行ハれしみや武者絵の板をりて蘇枋黄汁  
等ふて彩れり江戸ふても鐘櫃のざりハ紙を用ゐたるも  
あれとそれも此頃ハ少あきふや板行の絵ふとハ絶たり  
奥村文角ふとの墨繪の鐘櫃を板ふて摺たる目玉小金

箔置たるふとありし 續山井繪小かくや目ふ見おる鬼  
かゝのふり 軒風鈴 又色三線小手遊の懺賣あり

画筥ニ端午の日小児の戯小旗を門戸ふ立ちこやふハ帛  
を染ぬ鄙ハ紙ニ描く是を旗繪と稱す先鶴亀松竹を描く  
鶴ハ浮墨ふてかきぶふくを用ゐすして廻り浅墨曲とり  
てふし

按ふ五月懺ハ五月節句男児を祝するの吉例ふして傳  
いふ 五月五日 祝日 天仁 皇の 時蒙 古を 退治 する 結ひ あり 二本の



幟のハ其の家紋又ハ武者繪即神功皇后武内宿禰金太郎山姥ふとを画す中の長角ふる一本ハ幟ハ鐘馗を画すハこれを立て今幟ハ寸法ナリ鳥毛の鎧飾曹葛蒲刀ふとを添へて男児あつ武士の家々玄關の傍又ハ書院の前ふとへかざりつけたるふりふれを外飾といふ又所家にてハかざる所ふけれハ形をふりて座敷ハかざりたりふれを内飾といふ又紙にて鯉魚を貼りふれを吹き流しハ擬ハ高く竿頭ふあけて空中ふひるかハハ鯉の吹き流しと

祢ふ天保嘉永の頃までハ家々競いて幟吹流しと造りしものふりか明治のふりてハ此の例止まぬされと田舎ふてハ今猶往々外飾又ハ内飾をふりてのあり近頃鯉の吹き流し大ニ歐米ニ行ハれふれを製造して輸出する事し

緑記

好古小録ニ鎌倉荏柄天神録記三卷画行長書石山寺録



記五卷 信補詞實二隆三隆策詞呆守僧正芽四画光 東征傳繪

錄記五卷 司簽鷹 志貴山昆沙門錄記三卷 僧画并詞 誓願寺

錄記二禎 名画不工傳姓 清水寺錄記二卷 公画光信書當時 泣不

動錄記二卷 成画光 因幡堂藥師佛錄記三卷 尊画光信書 清

涼寺融通念佛錄記二卷 口画大丈法眼永春備前守光國粟田

守光行土佐守行廣春日修理亮行秀詞上卷後小松寺 鞍

馬寺錄記三卷 画得野元信 解脫明慧錄記一卷 画巨勢有

藤澤道場修行錄記十卷 二画隆光行詞 画圖品類二卷 田天

皇錄記 一三名三 東大寺八幡宮錄記三卷 大画宗行務公順

東征傳錄記五卷 道成寺錄記 画工佐 見親音錄記一卷

画位吉豐後法 地藏錄記一卷 大念佛寺錄記三卷 多

武峰新錄記二卷 画位吉如慶 藥師寺錄記四卷 寧府錄

記十二幅 北野天滿宮錄記四卷 画伊後 真如堂錄記三

卷

本朝画回品目二 壬生寺錄記一卷 川画新在街門 堀浦乙

室寺錄記一卷 以繪所負和賀守伊 武州王子稻荷錄記 画尚



信  
加茂祭草録記一卷  
内繪  
所頼  
隆芳  
詞入  
道臣  
伊豆権現縁

記  
正森  
十六  
年三  
月画  
永

按小縁記ハ是へて神佛の由来をよひ功德を記載し画  
回を加へたるものをいふ古ハいふ画きて巻物とし又  
ハ板刻して巻物とせしものなり今猶各地の神社佛閣  
ニ一枚摺或ハ冊子のせし縁記ありて参詣の人これを  
購ひ去る

金太郎繪

享和二年正月永壽堂西村與八板失題柱ニ七福神とあり  
草紙の末ニ 清長画の金太郎年々さしいたし申候處御  
意ニ入りたひた、しく摺出し難有仕合ニ奉存候當春も  
例年の通りさし出し申候所もとめ下されへく候  
按ふ享和年間金太郎繪盛行ハる其の筆者ハ清長の  
いふあらは一世歌川豊國おとも画きたりされと清長



の如く行ハれず清長の画く所ハ画法狩野家より出てし  
筆力超凡他人の及ぶ所不あらざる其の年々画き出たせる  
ハ實ニ夥し余が掌一閱見せしもの終るも路二十有餘  
あり抑清長の金太郎繪の行ハれしハ蓋唯其の筆力の超  
凡ふるにふるふあらざるあり清長の師ハ鳥居三代清満  
おして清満の死する其の子某ハ画を學ハるして鐘箒を  
業とせしをもて鳥居の画法を傳ふるものふるよりて人  
皆相議し門人清長をあけて後を嗣かしのんとし清長辭

して聽あすされ其の實ハ獨立して一家をふさぐを欲す  
るなり後に人々の強ひて請ふニより忽一片の義使心を  
おふし鳥居家を嗣き四代清長と稱したり志かして清満  
の孫の五六歳ふるを養育し日夜画法を研究せしめ終ニ  
鳥居家を嗣かしたりされを四代清峰と名後ニ改む清満其の  
間清長の苦心して教育をふせしおと早く世人の知る所  
とふり嘆賞せざるものなきかの金太郎繪の如き人皆清  
長の意ありて画けるものとおし出板おとふ率いておれ



を購ふたれ山姥の金太郎を養育せしとハ後世慈母育  
見の亀鑑として傳ふ所ふれハあし近頃歐米人亦の金太  
郎繪を賞美する事と甚しかりて年々出板せし數千の金  
太郎繪も今ハ殆稀なるに至れり

化物繪

嬉遊笑覽ニ花山院のあそびたるのかりハ傳はらる

光信の百鬼夜行を祖として之信ふとの書たるもありさ  
て其奇怪の物小名のあるハ淨土繪双六ふと其始のや其  
名の大略ハ赤口ぬらりじよん牛鬼山彦木とらんわいら  
りわん目一口坊ぬけ首ぬり佛ぬれ女さかばみ身の毛だ  
ち其外さま／＼あり

青本年表寛政五年の條ニ文軒翁曰く此頃より化物咄の  
本行ハれ戲作の類少く衰へたり

按ふ化物繪の行ハれハ安永天明の頃おして鳥山石



燕最上の繪小長し繪本百鬼夜行および画回百鬼徒然袋  
等を著ハして大ニ行ハる寛政年間ニ至リ終ニ化物吐の  
草紙流行するに至れり石燕の化物の名ハ野寺坊高女  
と云せうけらの類あり  
又按小画回品類ニ百鬼夜行一卷画光重按ニ明德の比の  
古画あり画工詳からる同書の書入小家系小行秀画又國  
朝書目小ハ光吉画とあり又本朝画回目錄小ハ光信筆の  
百鬼夜行あり又光起の百鬼夜行あり

かき繪小袖

嬉遊笑覽小衣服子画をわくハ古よりあるおとなれと云  
れハ墨繪をかきたるる流行しあり友禪として仕いてし  
始りや椽久物語小白志申其の長はをりに京の幽禪か墨  
繪の源氏人の目ふたつ程ふれとも其頃未だ世小衣装法  
度もふき時そかし云云元文寛文の頃狂歌集に白むく小



源氏繪かきたる女中の雨ふぬれたるを見て白ぬり小墨  
て源氏をカキクケコ雨ふあたりて身はウリルレ口諸艶  
大鑑五畧墨繪の山水宋印を紋ふつけて曙染の裏を貝の  
口ふくけあひし西鶴織留二近年書繪小袖を仕出し俄分  
限とふりぬ

銅板画

繪画叢誌集八小本邦少て銅板画の権輿ハ亜欧堂田善と  
与田善ハ岩代國岩瀬郡須賀川驛の人なり近頃同驛の内  
藤順耳氏より其畧傳ふりとて一篇を寄せられたり曾聞  
く所小参酌して之を記さん田善とハ姓の永田と名の善  
吉との各々上下を省きて之を書し亜欧堂とハ亜細亜欧  
羅巴二洲小象とりて号せしあり其家素と鉗屋を業とし  
父を昆山と号し善く山水人物を画く田善知き時ふり画  
法を父小学ひ業稍成り谷文晁の画を觀て慨然として嘆



して曰く予終身筆を執るも斯人不過く其と詰は其志  
か其新機軸を出さん不いと是より專写生を事とし頗得  
る所あり其名漸同里不顯ハる因て深戸の業を究其不譲  
り別不一空の居り丹書を弄びて業とあり此時陸奥國（今  
磐城）白川藩主松平樂翁（名定信）賢明の聞えあり田善の画  
を見てこれを嘉しし獎つて江戸不抵り司馬江漢の門不  
入り油画を學ハしむ是蓋享和年中不ありしなり樂翁  
偶日曼都府おふハ公園等を因せる銅板画數葉を荷蘭人  
不獲て乃之を田善不ふしたり田善見て大不感し日夜刻  
苦工夫を凝し遂不模刻して樂翁不呈是實不本邦銅板  
の始と其樂翁頗其技を賞し蘭人不贈らん為の淺羊金  
龍山及江戸名勝の圖を鑄りしむ後田善長崎不往き銅板  
の法を講し其技大不進むと或ハハ不樂翁竊不計り江漢  
田善の二人を蘭船不托して歐洲不航し彼地の山川風俗  
を回画し傍銅板油画の術を修めしむと當時海禁頗嚴不  
事若し發露せハ家を亡不し宗を覆すの恐ありより深く



其事を秘し世人をして之を知らしめ其元來樂翁ハ田善<sub>安</sub>  
家小生れ出て、松平氏を嗣し人おれハ田安藩中ハ往  
々之を知る者おれと互小戒めて漏洩を防ぎしと然れ  
ども此談話口耳相傳て同藩の老人中ハ今ハ声を密の  
て之を語るものありといふ却説田善既小遊小倦て歸る  
とき樂翁おれ小福を給して士林ハ列々文政五年壬午五  
月七日病て死す年七十二歳其造る所の油画等世小傳る  
しめ至て稀なり白川駒ある鹿島神社小掲ぐる額ハ佃島  
より白川駒を望むの圖おて享和二年の作小係り須賀川  
駒の諏訪神社小ある額ハ畧前回小類し文化七年の作と  
お<sub>對</sub>田善今を距るおと七八十年前小ありて本邦未だ曾  
有らさるの技藝を修むと雖人の之を知らしむの解おく声  
名白川関を出てさりし明治九年龍賀東巡の日田善及  
江漢ハ油画二面を行在所小掲けたる小宮内省小御買上  
ありしより其名頗小遠近小聞え寸椽尺紙皆争て之を珍  
藏するに至る田善ハ造る所の銅刹多賀城碑及江戸名所



回数面の板ハ今現ハ内藤順耳氏の家ハ存セリ又田善可  
 香村といへる画家ハ授けし繪具の法ありとて岩代國若  
 松ふる林平治といへる人の家ハ傳ハる文政元癸七月十  
 八日製と云るせし一書あり今敢必用ハあらざるけ  
 れと往時の状を知らんハ為の小其写を掲ぐ

- 一生五シヤウ 三匁
- 一トウカウシ 中三十匁
- 一トウシシ 三匁
- 一白口ウ 三匁五分
- 一トマリ 三匁
- 一トウカウシ 中三十匁
- 一トウシシ 三匁

一工ノ油 三合ノ割  
 一シヤウノウ 三匁

是ハ煮上ぬけて後ハ入る初より

但シ白ハ唐ノ土 融クスリテ入 赤ハ朱 青ハベル

黄ハ黄ワウ 黒ハ工工シ 夕イシヤ紅カウ 緑ハ

青ト黄ヲ交ル

右鍋ニ入テ度々煮工立テ、次ハ至ラユルキ火ニテ干

日モヒニシワマリ候ハスハアシ、扱跡ノカラヲシガ

リ陶器ス、ニ入置イツマテモ置テモカハルイナシ



右勝手のりりのわきへ入置く

鞠繪

繪画沿革考里川真頼二出雲風土記上卷惠曇卿の條二惠

曇卿ハ郡家東北九里三十歩須佐能乎命所磐坂日子命

國巡行聖時至聖此處而詔此處者國雅美好有國形如画鞠

或吾之官者是處造事者詔故云惠伴神龜三年改字惠曇云

云繪鞠といふふハ繪を畫きたる鞠ふる故ハ繪鞠の

名あり周て楯ハ草のて造りたるものふれハ物の象

形を彫つくるハ非をして画きしふるへ云云

繪画叢誌集二巴圖の說 大学医学部の教師ワリネル

氏の說ニ古聖人易象を作り三を陽と三を陰とし其陰

陽循環して窮りふるの象を示す為めハの圖を以てす

蓋し世ハ勾玉と稱して珍愛するものハ其一片則此の

形あり又此形ハ万物生成の摸象ハして動物の胎生印生



二限らず都て植物の種の如きも自然不咸胎して皆此形  
あり故ニ古人此意匠を以て之を作れり又往古の人ハ尤  
天地を尊敬せしものあり故ハ不則其句玉を或ハ襟不懸  
けふとして今世の守護符の如く不身を故たふして貴重  
せり考ふハ不祇園社の如き諸神社ハ多く三巴の紋を  
用ゐたりされ或ハ又一片を加へて天地人不象りたるも  
のふらんと此説ハ氏々考按ハ不出たるものありてまた  
其當否を知らされとも言頗理ハ合ひたる所あるハ如し  
凡繪事不於けり一畫一画も都て道理に外ならず故不委  
く之を吟味せハ千種万類の物象ハ着々其理を究むるを  
得つし固て也の説を掲げて以て他を推究するの一端  
不傳ハ



水画

水画ハ文化年間浪花の人松本氏一雄仙鶴堂の発明とし  
て即水面小細沙を浮へて画を作るといふ文政元年松本  
氏一書を著ハして水画指南といふ其の凡例小  
一凡水上小物かく事ハ古よりの誘ふものゝかり難き  
事のためとへよして行水小かくよりもはかなきハ  
おと言つらねやまともろおしまた其のためしをきか  
る然るに予はからる水面小沙石を浮へる事を得て思



ふふおれもて画をおさハつれくの一興ともありあ  
る時ハ床の上小備へて窓を慰むるの一具ともあらん  
と昔ハあゝの点景盤小倣い画ハ盆画小順ひ沙石を彩色  
して試る小細画といへとも盡くからざるハあし筆も  
て画くふりも尚麗ハく且數日を経て損する事ありし  
されハおれか名を水上沙画とも呼へけれと云ハおと  
ハリ小過たらんとてたゝ小水画とのゝ画へぬるハ根  
小予の負せたる名あり水上小砂を盛りて種々の形を  
おそ物から画といへる事能ハるといへとも其の形小  
泥もて去ひて画とハいへるなり

一画ハ諸流多しといへとも又ふハかハリ此水画ハもと  
より筆意筆勢とてもあらぬ細工物おれハ法則更ふお  
したとへハ小刀をもて人形をきさめる小びとしく魚  
画の人たりとも意小應して画をおさへし画法を去り  
て細工氣のおきふり却て画を去らるゝして細工心のあ  
るかたおそまゝへし



一 画道具ハもとよりあらず小あらず予か作りおしうへて  
つかひあ、ち、を氣候小名を蒙らして圖をあらハ  
る用るやう圖の傍小垂しくあらずせりあひて此道具あ  
らさる小ハあらしく人々つかひよきやう小製して用お  
へし

一 水画ハ跡を圓して此書小載せたるハ砂の用おやう小  
心得ある圓のうを出してあらずへあらせんり為の砂  
おて画きたるま、を予ら友梅庵子の筆もて写せるふ

り画法小よる小あらず此圖中水面小波をか、さるハ  
器の中小自然の水あれハあり其余の画面をへて是小  
准してあるへし必しも画の善惡小拘るへからる  
一 文字をか、小ハ画をつくるあ、ち、をえて砂を遺ふへ  
しいか、との細書おても心小意せさる奉るし  
一 いぬら子のと、の秋予ら友五六輩つぶら江の宮小あ  
うまり此水画十跡を献し奉りしより見る者追々予ら  
家小つとひ其術を乞小まかせあらましをおしへしよ



り今專此地不流行せり爰不於ておもふ不秘事ハまつ  
毛のたとへみ如くさせら事もあるぬをいかめしけ不  
ひめおかんもたふかましくかたはらいたき業おれと  
てまたい此水画の口傳色砂の梅へ様帛ニ用るやうの  
術等まてもらさる此書おあらわし尚も廣く世に傳へ  
て好事み人のもてあそいとあらんおそ予か本望おれ  
たとい童蒙たりとも此書を見る時ハ即座小水面小砂  
石を浮へ其傳画をあらわさる事詳おあらせりもし

此書を得て其おとくふらさる時ハ予々いつわりを告  
るの罪を責め給ふともさらふ言ふおとなし

文化丁丑如月

浪華 仙鶴堂一雄識

○砂石製方傳

一地砂梅やうの事

るへて砂ハ土氣の交りたるハあしつれおもあれ  
川中の砂を用おれを兵庫砂ともいふ此砂をとりて  
幾度も川中おてよく洗ひ日お不して後茶粒あるひハ



小糸胡麻芥子のちとく大小次第ふらひ分け此砂掛

目百目白蠟藥用の蠟此掛目五五五分を合せうき

おへお入れぬいぶんよわき火おかけふくくかきま

せて後さましおけハほしもの、菓子め如くかたまり

ぬらをもとくたき又ふるひおかける再度かたまる事

ふし此粉の用ゐかたハ山水人物花鳥何ふても其画の

けしき薄し是を地砂といふ

一 砂粉の傳

前よりいへる地砂をやけんりておろし細おろして絹ふ

らひお通し川水お漬けうとんめ粉のちときらハ粉水

小うくをさりて箒度七水をかおへし此らハ粉がしふ

ても交りあれハ匙おかけて砂めすはけあし、よくく

取捨て後水予して又ふるひおかけ是小色を添ぬあハ

せの事ハ委しく次お出せり又曰く盆石小用ゐるハハ

方砂ふり備後後の産物もふいり故夫ら中細まおし波を

引けらるを波流めて浪粉と呼ふ是小色を添て盆画の粉



色と云此浪粉不製を加へ此水画不用ある不染色砂の  
さはけ共小川砂の粉よりもほろか小勝りてよろし細  
末の仕様川砂と相同しくうハ粉をふくくさりて用  
あへし

色砂の傳

一青色

岩緑青又ハ酢緑青めても川水小三日はかり漬置き毎  
日水をかへて後水予してあるひあけ此目方拾分砂

粉抄分白蠟四分右火小かけ製する事地砂の所ないへ

ろか如し仍て以下染色薬方の分量の之をあけて製の  
仕やろを畧す前小准して去るへし

去へて淡色の物艶を好のろ色小ハ備後の砂粉を用由

へし川砂おてハうつり要し、以下皆此の如し

一黄色

山施子をよく煎しか去るを去り砂粉をそのかけ予不す  
へし又雌黄石黄おて深ろもよし其粉色の品小ぶるへし



此目方拾分白蠟五分右調合の製前小いへ別黄ハ至て  
むつかしく三五日のうろふハかぶらす水上小色ちり  
て持かたし是をとむろふハいさ、か年練ありて書と  
りかたし

一赤色

朱を川水小三日はかり漬置折々水を仕か之水干して

此目方拾分砂粉五分白蠟六分右調合の製前小同し粉

色の品小よりて丹弁柄辰砂等を用ゆるも分量製と

も小相同し至てふき色不用ゆるもハ極朱四分長吉丹

五分砂粉五分白蠟五分右製前小同し

緋色ハ強ふむつかしくたやそくハ染りかたし別小口

傳あり

一白色

砂粉拾分白蠟五分製方前同し又石膏寒水石等をも用

粉色小よりて唐の土を用ゆるもあり時宜小あり

一黒色



砂粉を濃曇りて染めよく乾かし此目方拾分白蠟五分

製方前同じ是等の砂粉ハ川砂を用ゐてもよし

一 嵐色

右黒色の墨を淡く用ゐるのゝあり分量製方とし小か

ハる事あり

一 花色

極上の粉藍蠟七ふかし川水小三日はかり浸しをき

砂粉を染め乾かして此目方拾分白蠟五分調合製法前

小同し

一 浅黄色

花色の藍を淡く用ゐるのゝあり製方ハる事あり

一 萌黄色

雌黄小あいらうを摺交るを画家小草の汁といふ是小

て砂粉を染め乾かし用ゐ濃淡ハ繪の具の用ゐ方小善

別々ハ一葉方製とも小前小同し

一 樹色



樹木の色をあらわしハ製したる鼠色と并から色の砂粉  
をよき程小文也合せて用事へし

一 桃色

燕脂ハて砂粉を漆の蔭干ハして此目形ハ白蠟ハ六分  
右調合ハ至テよハきハ成ハかけ製スへし

一 藤色

茜汁ハて砂粉を二遍はかり漆の乾かして此目形ハ

白蠟ハ五分調合製前ハ同し

一 鶯色

古わうの汁ハて砂粉を漆むへし藥方分量製共前ハ同

一 紫色

生燕脂ハ藍蠟を文也あはせて砂粉を漆へし又茜汁ハ  
漆のかわかす事ハ八遍はかりハして大射紫ハあらは  
を用ゐるもよし右いづれハ分量製共前ハ同し又古紫  
ハ別小傳ありて爰ハハいひ難し

一 金銀砂子



砂子又粉泥をおくハ薬製を用ゐる其まゝ置きてよ  
し

此外深色許多ありといへとも略しぬされらふおそら  
へて考へ去るべし

一 荒砂の事

砂 大さ山柙粒より大豆はかり迄ハ此砂目方 百目白蠟

六匁五分 調合製前不同し火ハ少し強き方小をへし此

此上大豆よりむくろどばかりの石ハたやそく水水上小

浮ゝかたし是ハ又別傳あり

一 製方四季加減の事

冬へて右小去るを薬の分量ハ冬の製より春秋ハ右の

目方小を割を増し夏ハ三割を増して製をへしされと

時候の寒暄小よりて左略あり一概ハ言ひかたし象

ハ其あらましを去るせり

一 水盤の事

器ハ何おてもあれ白色の無地物よりし模様あるもの



漆色あるものハ取合あしく画く小心得あるへし器小  
少しおても油氣ありてハ画あり難し以前小物入た  
錢様めものハ能々吟味し油氣を去りて用むへし水ハ  
川水を用む井戸水ハ金氣ありて少りしからず

一 砂石をき様の事

そへて水上小画をかゝんと思ふ時かの砂画道具小砂  
をのせ右の手に持ち水面おむかひ左の指先おて道具  
を志とくくとたゞきて砂を落し繪をおまへしぼかさ

んと思ふ時ハ砂板おのせて臍を引みて砂を落すなり  
又ちいさきふるいお入て落すもふしかくハいへれと  
おハ画あす事のあらましを言のこめてとかくハ手術  
と口傳とおありて思ふかまゝおハかき得難し

一 水止の秘傳

水上小砂石をおき沈まする方ハ既お前の製傳おくハ  
しくいへりされとも水おろく時ハ即繪乱れて志げら  
くもたもち難し此水のさハぎを止るおハ焼明礬 六反



白さしけ四分 此二味を合せ極まふし兼て用意を致し  
水画を致さんとをふ前何のても器小川水をくし入  
此水との二味の粉を水中へ入れよくかきませ水の静  
まりたる時かの製したる研石を入へし凡水一升小此  
粉二つまゝはかりと志るへし米粒はかりの石までハ  
沈む事なく日数五日程ハいさゝかも繪損する事な  
し此外至て荒研ハ前小いへる如く別小口傳ありて此  
水止の製方も是とハかわれり象小ハ只水上小繪をふ

を事のあらまゝしを志るせるのゝあり其念画を水底小  
沈ませをく術又水上小大石を浮へる術同しく草花を  
立る術畧して花鳥人物文字等を書き水上小のあり術  
あり是等の事ハ手練小ありて至て奇術あり筆紙小ハ  
述へかたし懇望の方ハ心置なく予り家小まりてとい  
給へかし何事小もあれ世小いかめしけ小風流をとふ  
へ傳授ふとののり其價を貪り或ハ製を秘して其  
品を高くありハひの助とあるものとたもい給ふおと



ふかれもし砂石をちしらす事のかつかしけあらん  
人ハ木のれか家小裂しらすを心やまくわかちあたふ  
へし木のり家居ハ南久太郎所心為橋節のまゝく東か  
る  
仙鶴堂 松本一雄言

大画

逸人画吏小古澗和尚 京師淨福寺の住持たり丹青小巧  
あり最大図を作す小妙ふり今存せるハ京師妙心寺にお  
る涅槃像あり又草画小七福神おふび大黒の像あり世小  
古澗の大黒と物を其大図小至りてハ餘人の企及ふ所小  
あらざる  
書画一覽 天明七年 小古澗名ハ明譽号虚舟和州郡山西岩寺  
小住良画法前軌を脱して行筆超凡好きて人物を画き多



く大黒を写す又大画ハ於て豪放益あらハる

逸人画史ハ高田敬輔 江別日野杉の上の人あり云々善

画の聞あり富峰杉ハ以鮎鯉等の画ハ人の珍玩をる所を

り後洋福寺の古澗和尚ハ就き大画の法を学へり云々

繪本倭比事信西 著 祐ハ大画ハ筆製を第一小用由へし健筆

小かくへし和らか小善てハぬかりて是由るものふり社

頭の繪馬堂塔の天井或ハ杉戸屏風等の画ハこれ等ハ龍虎

獅子大鳥大人形の額を多く画けり

按ハ大画ハ別ハ一法ありて其の法を知らされハ画く

註ハさ々ものありとそ我國の大画ハ移し来れハ北典

司の涅槃像古澗の大黒等ハして其の絶大あらハ蓋し

葛飾北斎ハ達摩の大画ハ如くものふからへし其の大

才疊百ハ十疊敷ハして牙俵ハよひ撥摺ハ簾子等をもて

小れを画きたり江戸の護国寺兩國の合羽ハ市場等ハて

画きたれと其の画傳ハらる唯尾州名古屋ハ於きて画

けらハ今猶同地の西掛所ハ秘藏してあり詳細ハ拙著



葛飾北舟傳小就きて見らへし

細密画

浮世繪類考橋守國の條小 姓ハ橋樞村氏名ハ有徳宗兵衛と稱し後素軒と号し浪花の産かり云云刻板の密画小 妙を得たり精密奇巧此人より起る云云享保時代刻板の密画唐土訓蒙圖彙小始れらるるへし文より以前かゝる

細密の板本を見るおとちし

一書小葛飾北舟回向院にて布袋の大画をかきしあまふて糸一粒へ雀二羽を画く人みふ肉眼をもておれを見る小 小甚しむ云云

按小古来細密画を善せしものありしあらんされと今

詳ならん彫工勝友常葛飾北舟翁の彫刻下画一百三十有餘葉を藏せしか其大さ方四分五分或ハ一寸一寸五分其の画ハいつれも細密にして着色極めて精し人物



あり花卉あり鳥獸あり中ノ奥州松島の全景を画たり  
一葉あり堅一寸五分横二寸五分の中ノ木きて松島の  
嶋嶼數百を画き傍ノ片假名をもて島名を志すし七十  
一翁北斎爲一筆と落款せり其の極細極小ありすと壯  
年の徒といへとも肉眼をもて窺ふ能はざるあり實小  
七十一歳の老翁か画きたるものとハ木もハれ其武州  
杖父の人小玄黄斎といへる彫刻家あり視力人小過く  
白昼天を仰きて辰星を算ふ掌堅幅一寸五六分の方面

小孔門の弟子三千余人を彫刻せり又大黒天の根付を  
刻し其の全面小鼠一千を彫刻せり其の纖細あり因よ  
り肉眼をもて見ら能はざるなり此傳の根付今英用と倫敦  
此の人生涯眼鏡を用ゐる且身幹長大にして歳九十余  
よく日小二十四五里を行く人皆仙と稱す明治十八年  
歳九十五六にして死す印籠譜二巻を著ハ其の彫刻  
の纖細ある未だ掌見さる所ありかの守國々居士訓四  
景小比きれハ其のまされると萬々あるを知りし



序小畧上收千里平盈寸驅万象於指下雖有明眸者非極視  
專瞳數拭屢翕蓄而後張不可得其象焉洵曠世之絕技平  
生所未覩也畧下

又按小世小密画細字を善くする者往々あり余り  
幼時下谷山下の路上にて米粒へ夷子大黒を画きて賣  
りし一老翁ありし頃淺州公園にて豆粒へ題目念  
佛又ハ神名の文字をかきて賣る者あり

略画

浮世繪類考北尾政美の條小狩野家の筆意を學ひ又光  
琳或ハ芳中か画法を慕ひ略画式の工夫世小行ハれ云  
近年の繪手本ハ此人の筆多し是より世小薄彩色摺の画  
手本大小流行云云  
武江年表享和年間流行物を挙くる條小北尾蕙斎畧画  
式と号し浮世繪の畧画を工夫し彩色摺の粉本數篇を採



行術

按小北尾政美ハ鉄形氏俗稱三次郎名ハ紹真杉鼻と号  
其北尾重政の門人かり畧画を工丈し畧画式畧画苑州  
花畧画式蕙奇畧画等を著ハ也

うつし繪

嬉遊笑覧小寛文延宝の頃影人形といひしものハ今の手

をうつして影おし鳥さし犬の首鷹おとの形を写し又い  
さゝら紙おと切りて其形をうつし又身おさましもの物  
とりつけて影おしうつさおとおとハあり今の硝子小繪  
をかきて彩色したるうつし繪も予々知き頃より見しもの  
のおれと其頃ハ今のおとく巧おとおとハおく石臺の花  
の開く所又ハ掛もの、白紙おとあやかて文字のあらハ  
るゝおてありし〇化物のうとくおとハ今もかいらる紙  
を種々の人形お切りニツを替串お挿して裏をかへせハ



その物かわるかけ繪ハ其頃ハあかりし〇浴陽集小春

の夜や影人形のはつ芝居武江年表小享和年間の余小

都樂といふ人うつし繪をほしむ

繪画叢誌小藤繪の戯ハ昔ハ黒き紙をきり板き竹串を四

つ小割りて矢羽如くおさし行燈小写し玉藻の前の姿を

九尾の狐小かいらせ酒顛童子を鬼小かいらせの顔小

てありしか享和年間都樂といへる人エキマニ鐘といへ

る目鐘をもととし玻璃へ彩色繪を画き桐の板小嵌りせ

しめ人物風景あし自在小かわり働くの工支をあし写し

繪と号け衆人小見せて大不行ハる是より此の技をあそ

者多く製造もまた精巧ありあの都樂といふ人嘉永元年

歳七十九日本橋瀬戸物所小住せしか終を知らそ

按小うつし繪ハ嬉遊笑覧小青藤山人の路史を引きて

影繪戯ハ漢の武帝小始まるといへりいつれも古くよ

りありたる遊戯あそびし繪画叢誌小いへる矢羽の如

くおして行燈小写し戯れの藤繪ハ近き頃まで坊間小



て賣るものあり余り幼時此の蕨画を玩ひ行燈小うつさ  
んとて油をふほし阿母小叱られたるおとあとありしさ  
れとかの玻璃小画きたるをうつしてさせたるおとハ都  
樂の始ありへし近來おれを幻燈と号け教育小関る種  
々の物をうつして小学生徒の娯樂とあり

びら画

按おびら画ハ一画びらといふ蓋し画きたる紙或ハ  
布の風おあたりてびら／＼とあり名つけたるもの  
あるつしるびらのちハびらららハ清水晴風氏の説おびら画ハ  
もと上方より流行し来れりものあり東京おてハ文化  
年間落語家三笑亭可樂の浅草の孔雀長屋の席亭おて  
椀かおけれハ茶碗下あかれといふびら画を貼り出た  
したるを始とす其後大お行ハれて酒樓茶店の開店又  
藝人の名弘め祝言の祝賀等おもこおのびら画を用



あるとありたり歌川國芳の門人芳兼内俗在祐田蝶  
と号してびら画を画き梅素玄魚喜俗三祐宮城またよく画  
く然れとも此の二人ハ皆別小專業ありて画きしもの  
あるか後ハおのびら画終小一専門の業とありて浪  
花蝶屋もふとり下駈と稱へ一流をかき出たせしものあり其  
の門人小びら辰といふ者あり今盛小行ハる

千社参の札

題名功德演説ニ曰く題名ハ至テ大ふる功德ある事あり  
其功德を知り謹テ名を表し堂社小貼る時ハ長おへ小  
堂籠り通夜長参め代りとおりにて信心の誠能佛神小達  
佛神も誠小感して随應深し常小隙なく題名を念とし惡  
念を生まへからる暇ある時ハ出テ題をへし少しも遠く  
筒所多きを貴む念るへからす若納札を禁する方へハ題  
をへからる題名とハ姓名を題し署する意ありて名牌を貼



るふとふり再遊して旧遊を思出を助けもあれハ至て風  
流の事と古中華ハ古昔より此事あり唐の代ふりて  
至て盛ふり既ハ韓退之の文集ハ載せたり我朝人皇六  
十五代の帝花山院頻ハ常おらぬ世を感じ給ひ御在位お  
つかハ二年ハ一て終ハ万乗の帝位を棄て剃髪染衣の御  
身とおらせ給ひ入覺法皇と号し奉る佛眼上人御導師と  
おりにて西國三十三所の観音を巡礼し給ひ美濃國谷汲ハ  
て札を打納め佛歸京まゝくけり或夜熊野権現法皇の  
御夢枕ハ立給ひ君佛を信じ給ふおと厚きハより我此世  
ハ現し假ハ佛眼上人と顯ハれ君を御導き申ふり我普く  
濟度せんハ衆生我祠へ三十三度参らんよりハ一たび西  
國三十三所の灵場を巡り終ハ我社へ参らん其時階を三  
段下りて拜を受くハ一と示し給ひ権現ハかき消るおと  
く失せ給ふされハ納れといふおと此佛時より権輿あり  
今の世の西國坂東四國ハ十八ヶ所順礼修行の起原も諸  
民法皇ハ御修行を見習ひて神佛靈場ハ題名して納札を



るちと、ハあり、あり、睡餘小録ハ云西國順礼の事日蓮上人の書ハ近日諸國の觀音を拜する者一兩輩茅庵を叩き候畧古きおと成へし然れとも札をちつおと應永の頃より専ありと見へたり天愚公三世大福の墓を開きしより題名納札の事都鄙遠近ハ流布して諸人先生の擧ふふらひ信者日を追て倍し文化年間ハ至り初午稻荷廻り己待辨天廻り地藏廻りハ十八ヶ所題名納札専ありて三十間堀銀市の家にて題名の人々集會せりされとも此頃

ハ納札交易の事ハおかりしか其後上野摺鉢山にて集會を文政度ハ至り連札といへるを始む櫻連一々連輪法連擬宝珠連巴連虫喰連おと唱へて題名の札印を同ふや或ハ東海道五十三枚續三社廻り等の連札を製し下谷廣小路福山といへる茶亭にて替札の事を催せり天保のはじめハ角連四連大小けびり替札の事盛ハ行ハる其頃集會所傳聞のまゝ左ハ志ろ古永代橋高尾茶亭今川橋山の井薬研堀車屋茶亭待藏前高砂茶亭駒形東雲亭神田



松下町信樂茶亭麻布一本松茶亭下谷廣小路丹波屋茶亭

千社詣納札控の事

信心を餘所おして名聞お札を張るへからる

活業職分をかきて遠行をへからる

替れ小半を尽し新規を競ふて費をかけへからる

神佛社閣お訪て官殿を憚らる落書をへからる

集會の席お喧嘩口論都て物騒敷をへからる

右之條々堅く相守信心并礼お輩ハ神佛の冥助著明諸

難諸病を免れ三世の大福を受諸願成就如意満足疑ひあ

らへからる

按お題名功德演説ハ悦翁田定賢といへる人の著述也

中お天愚孔平の事を載せてあり此の孔平の事ハ百家

崎行傳おひ曲亭雜記等おも記しありて萩野氏おハ

信敏字ハ求之お燈谷と号し又天愚お孔平と稱す儒を

もて雲州候ニ仕ふ仕年より四方の神佛お訪ふて題名

して歸るを常とまりれ千社詣中興の祖おりと詳細ハ



本書小就きてゐるへ

嬉遊笑覧小千社参ハ明和七年撰の江戸名物鑑小も見

えを安永此方のちとちるへ神社のこあらを佛寺

小も詣る千社参といふハいかかり翹五吉とかい

へるハ其始の頃の者小やそれか札ハ文字をハ書た

小て板小て摺た了小ハあらは是等ハ其徒の中小て廣

く知られたる者とあむ唯人小去らるゝを手からとる

いと益なき戯あり

漆物繪

大繪回髻古帳序ニそれ歌人ハ見ねとも富士を目前小

とり大海をむねの内小た、ちる事情ハ道小よりて賢

といへとも凡形のおきハ功能の筆工小もろかまを今爰

小うつし侍るとりちの繪古帳奥方局雨中ちるつれ

又ハひいふかたあど好ましめんため則五色の繪の具拵



様までおとくあらわし初に浄穢古のたよりともあらんか」と令極行者也

洛下染物繪師

井村勝吉

五色のあはせ様并ニ本繪具絹布顔色立あはせ様口傳つかひ様繪の具揃やうの事

青

青きハろく去やう小膠を薄くあはせて能々去りおしらへてよし録青もと下地あらきものにて候へハぢいぶんをるふあきふしさて又草木の葉のかへりたる

うら小ハ白六と申て録青のうハぢをつかふ事あり又草汁と申ハ去わうと深藍とを等分あはせ候得ハ草の葉の青きふよく似つき申すものありおれ又揃へやう小かハリたるにてんハあく只二色をよくあはせ候へハ色よく細小彩色うつくしき物あり

黄

うら小ハ色あはるハ去わうきわうかあハ二色の内をりおれもよく去りて薄膠をあはせてつかふ物あり又絹類ハうら小んと申て一通あはるありおれハうハ皮を



よく削りわりたけふほさきてびぜん焼の火入内小く  
まりのかゝらぬをよしとま此焼物にてまり候へハ細  
ふたろをよめありうあんハ油多きよめあり油ふきを  
めきゝしてつかふ油あゝハ華ねハリてあゝく色出ぬ  
よめあり

赤

あかきハ光明朱かまゝゝやゝ二色の内ありおれも  
薄膠を入れよくまりてつかふおれを忍み具のつかひ  
様ありさて又鍋類おつかふあきハ紅又唐人紅地紅ふ

り六のつかひやろハ酢の汁あハせ又おめおきまふ  
き梅かわをほして水お出候へハ酢出るを合せてつ  
かふ中頃ハ玉子の白之又くるとの油をまほりてあハ  
せ候へとも夏おきハそおねつよく候へハたゝ梅酢ゝ  
紅小栗小候夏おきハ水おひやしおくろよく候少しひ  
めのりをあハせてよし

白

あハせてよし膠うよくして能々まろふあきあゝ様  
まろきハおふん又かおふん二色ありおれも膠を



口傳おしたふくくをりておまかあるが遣ひよく  
候かり又薄嵐おつかふ時此の胡粉お薄ををくわ  
へのれおふき嵐色おあり申あり又染物のかたふつか  
ふ白きお上々のおしろいをか去るお合せ又水おて  
ときてもつかふものおありそのおしろい萬の染物  
の色おふさいきおふりくおてふし  
黒 ころきおあふうつぎの油煙お又染物の上おてハけ  
んがうおしらへ様油煙おをはくろませ又おいらうも

おハせてふし其外染物の色の異遣ひ様いろくあり  
といへともおれハ染物のはいさいの極おるものつかふ  
人時の作意おふりて色をおれおれとありせかへ候へ  
ハ千色お出来候ものおりとかく巧者の正秘事ハマつ  
げとやらん世のおたとへと同じ事なり

大津繪



一代男 天和印本二 巻の三小寺泊の傀儡の家のさまをいへる

條小 屏風の押繪をこれハ花かたけて吉野参の人形板

木押の弘法大師の氣の嫁入鎌倉團右衛門多門庄左衛門か

連奴のれと大津追分のて書しのそかしるふ都ふ

つかく思ふ云云

五ヶ濃津の草紙蓋刺板の年月詳ふ頃あるれへとしも巻の四二龍

虎梅竹左字小かきたる枕屏風追分繪の奴の露の命を君

ふくれべいと赤き丹のて書きたる所をて云々上同東海

道分間繪四 菱川三師宣板画 二大洋大谷邊佛画いろくあり

と去るせり

似我蜂物語ニ上町の友達共よりあいて初心連歌の會を

して遊ハんとて先つ床のハ大洋粟田口邊のて賣る天神

の御影をひつはり竹の筒の花を生けかわらけの抹香を

ふとへけるく嬉所遊笑撮覧引

松の垂巻の三小大津追分踊の唱歌あり其内の猫ら三味

ひく酒のむ奴あたふ参小袖いかれた上同



傾城及魂番瑞小土佐の末弟浮世又平重興といふ者大

津小古々て繪をかきたるふしを作れり上同

本朝俗諺誌小飛洲の山中小毛坊主といふあり俗体小て

常小農業亦推し人死されハ導師とふりて是を葬る本尊

ハ石地藏或ハ大津繪の十三佛あり

本朝諸士百家記年宝印本巻の八小大坂長町七丁目團扇屋

喜兵衛といふ者あり此裏店小鼠関とかやいへる七十余

の老法師あり中間早ばかりの棚をつけて大津繪の三尊

をかけ一首の讚小繪小かくも本小きさめるも弥陀ハ

弥陀末末の古とハかつてたのみぬ

本朝文鑑ニ浮世又兵衛ハ大津繪の元祖云云

好色旅日記年貞享四ニ大津追分奴鎗持のいきりひのふい

画をうるか大谷云云別類考

賢女に化粧卷之三小池の側の針問屋花かたけたをやま

互ふとかく人と隣り合せ云云嬉遊笑覧引

浮世繪類考小元録四年芭蕉翁粟津の無名庵小ありし時



正月四日小

大津繪の筆のほしめハ何佛

芭蕉

俳諧日本國元録十六

附 追分の繪佛ハ後世を折任せ

土山林

同 大津繪小田向して行鉢たき

一睡

近世奇蹟考大津繪相模の賛小

大津繪小負おん老のおかれ足

英一蝶

一話一言ニ大津繪贅者の賛小

春の夜の犬ハあやふし目くら折 承中

紅粉画賣昔風俗といへる草双紙文政十小

大津繪小丹のまきたる暑かお 蓼太

此の他古人の句猶あれと略す

繪画叢誌江別卿友雜誌小大津繪ハ追分繪といひ又大谷

繪ともいふ皆賣る所の町の名小ちおとしふるへし鳥の

子紙を用ゐる粗末の彩色を施し印刷して賣る其画図ハ佛

画或ハ戯画にして奴の鎗持婢女藤花を擔へる図ハ年の



鯨をさへ一犬盲者擯鼻禪を喰引夜叉羅衣を着鉦をた  
たく芋の戯画ふり故ふれを浮世繪ともいへり畧注又平  
といへるもの画き始めといふ岩佐又兵衛とい異ふ  
なり云云

繪画叢誌ニ大洋繪の寓意を解して曰く

藤娘 紅顔細腰窈窕たるも齡ハ行水と共に過ぎ終ふ卒

都婆小町の如く老衰する時ハ誰も忌嫌せさらんや容貞

妍麗のたのみおきハ花の盛の如く凋落の時小至れハ顧

る人もおし寧刺釵蓬髮ふりと雖心裏の貞操亦そ真の美

人おれといふ諷意あり 十かりそと見る目も共小行水

の志はしとまらぬ藤波の花

夜叉念佛 心裏邪曲ふして念佛三昧する人を刺撃する

所の寓意ふして表面小ハ殊勝の形容を裝飾するも心意

邪曲ふれハ神佛何ぞ之を加護せん寧身を墨染せすと

心に裏正直ならんおとを望むといふ諷意あり 古歌ハ

まおとあき姿はかりハ墨染のおちちの鬼ハあらハれハ



けり

奴鎗持

徴々たるに身おして君主の威権を藉るものを

刺撃する所の寓意おして其下風の人お對する時ハ譬を

張り頬を脹らし人を白眼お見下し却て上にお向へハ媚い

諂ふ寧野おありて農耕をつとむるおそ大牛振毛の人お

らぬとの訛意おり古歌おふる人もふるらるゝひと人も人

ハ人おゝりとり毛ぬおわかろ

按するお大津繪ハ浮世繪の一種おして其の始詳ふら

を蓋し寛永以前よりありし画法ふらん喜多村信節の

説お大津繪ハ若佐又兵衛り画き始めたりとてそれか

子孫ぬかして又平久吉おとゝ落疑したる画もありた

しおからぬ事なり其画ハ信貴山玉藏院お明兆か地藏

井の繪を繪表貝おして十戒回をかきたるハ海北忠左

衛門藤原某とかありおれ今の大津繪おひとゝ清水堂

の類お頼政恠鳥を射たる回ハお海北忠左衛門の筆

おり寛永十三年乙亥六月吉日と識したりまた画者の



名ハ去らき奴の蓄椒を肴のて酒を大杯のて飲むと  
おろをかきたる上の方小當時の小歌をかきたるハ正  
しく光廣卿の書ありといふと此の説稍信を措くハ足  
るものあり去かしてかの浮世又兵衛ハかき始のて  
いふ説ハかの傾城及魂香ハ土佐の末身浮世又兵衛大  
津ハ去て繪をかきたるよしを作れる世人事実ハ  
りとし傳へあやまれるおらん又おれをよきたふりと  
して又平久吉おと、名のり出たるかありしおらん

又おの大津画ハもと佛画を専とせしおとハ芭蕉ハ大  
津繪の筆のはしめハ何佛又東海道分間繪圖ハ大津大  
谷邊佛画のりしとあるおても知らる、おりされと  
天和の頃ハ既小種々の圖を画きしものと見えて一代  
男小嵐の娘入鎌倉團右衛門多門庄左衛門ハ連奴おれ  
こお大津追分おて書きしものとあるおて知るへし喜  
多村信節の説おしめ画もとより佛画を宗として其  
外ハ傍おかきたる物おあらき佛像ハ田舎人の求るた



の小書初くと後のハ買ふ者もあらされハたのつから  
か、もふりたふふおとと或ハ然らん

盆画

盆画の傳書云く 和漢石を玩ふおと其故多し我朝ふ  
てハ山科のせんしのふと、申す鳴好し給ふ君たのし  
ま右大将藤原の常行といふ人此のふのたのしま右山

科の宮ふまふて給ふて紀の國千里の濱より大行幸あり  
し時奉りしいとたもしろき石大にゆき有し後或人の見  
さらしめまへのそぶきてたりしを御隨身とわりして  
取ふつかわきいくはたもふくもてきぬ此心聞しより見  
るふまされり是をたふ奉らんハお、ろおるしとして  
人々小歌ふませ給ひおまの守来ける人のをふん青き苔  
をしてまき繪の歌おつけ奉りける

あかねとも岩のそかふらいろこへぬお、ろをこせぬ



よしのあけれハ靈心按ふにせぬハにまろの器  
とあふのりけりたりかハあれとも盆山景の名あ  
る事ハ源頼政武門禮容あきを三條家ハ咫尺諸礼傳授  
のひとつハ平臺ハ石をまへたり星を石臺となん云ひ傳  
へし君臣父子師弟夫婦兄弟朋友の中も石の動かさるふ  
たとへ給ひしより頼政座右の銘ハあらひ石を重きとい  
へとも乱世の心あれハ工を添ふ業もあし物変り星移り  
東山殿まで只此石臺のみにて侍りしハ此殿風雅を去の

と給ひ或時ふの石の中ハ砂をそへ給ひけれハ自然の山  
の如くあふ成ふけるより盆山と名付られたりまた三伏  
の頃より石砂を銚ふうつし水をほらせ給ひ納涼を求め  
られしより石銚とあふいひ傳へたり是より種々の工を  
真行草の砂うちかたき定の深く秘々として伊勢守たよ  
ひ時の達人ハ命し給ひて瀆底を造り四季の砂ふんとう  
たせ給ひしを盆景のほしめとして今の世猶色々の景色  
を造りしちとハ昔かまされりちとハ中興休師七哲のう



ち古田織部の門葉小本阿弥光悦といふに至りて此道ま  
をく季しくふりぬ或ハ富士小色々の体波小四季のう  
ち分有風の吹らるるさま雲のちきいさたかぶらぬ体志  
くれのけしき雪のかたち或ハ瀧のいさきよきあれハ谷  
川のさびしき風情あり余ハあけてかそへかたしといへ  
とも至て深秘ふるちとハ波のうちかたふおそあめれ唯  
丹青家画工の華意もて打時ハたとひ其形ハあるとも空  
しく画盆とかりて盆画といふへからる習ひ得て知る

色研染様の事并繪の具名の次第

光明朱 水子丹 紫黄 ぶうあい 青い

煎しきわり 紅がら

右七時品のて發色小も染める事出束申候右之通

○朝日 光明朱を先茶碗小入水を少し入よくくませ

て砂を入またかきませむらふく染候ハ紙へうつし

かけばしふまへし



○ 桜色 水十丹を右の如く茶碗へ入水少々入随分誦す  
りませ砂をかきませむ去わうを加へてよし右去わ  
うを薄くとき丹を入れてもよし

○ 山吹 紫黄をよく水おつけひやし其上よくくさり  
つぶし砂を入またかきませ不し上べし

○ 青柳 不う藍をよく摺また紫黄を少しきり二色とも  
よくくまさせ合砂を入深へし加減あるへし

○ 空蟬 不う藍をよく摺つぶし去わうがちおませ合砂  
を入交合おかげあるへしむ去わうがち不致し候へ

ハいろよろしく  
○ 浮舟 あい不う少し薄くきり其上砂を入むらさき様

おかきませてよし  
○ 薄雲 よき墨をうきく摺其上砂を入れてかきませ

○ 花散里 先せんしきわう茶碗へ入火へかけとろく  
小煎 一つめよき不と小砂をかきませ深へしうきき

ときハ二遍もかけへし深様おていろく薄くも濃く



も出表候

○八ツ橋 並しをわう随分おくせんしあいろうを摺合

染へし又薄く候ハハニ遍も三遍もかけ候ハハいろよ

ろしあいろうをさきふり候甚加減あうし

○木立 紅からをよく摺ふき墨を少し入よくく二色

摺合砂をかきませ染てよ

○烏馬玉 まつあいろうをよく摺下染致し其上随分よ

き墨のて濃く摺二色を染候得ハ本墨のなり候

右之通のて幾色も其具の加減のて相成申候随分其源

氏六十條のても百色のても右具のようを取合次第のて

いか撮とも相成申候加減あるへき者あり

嬉遊笑覧の曰く浪花の画師長田武禪ハ月岡丹下の弟子

のて能画あり清貧を安として陋巷に居れり寒暑つよき

間ハ画をかき夏月の唯石膏をもて假山を作ると巧

このてハ正面のふとし画法ふよりてあり云云又曰く

盆画ハ盆山より出て盆山の庭に白砂を蒔くとより出



てたろふらん盆画ハ砂を五色小深めて源氏の巻の名を  
えて呼び象牙の丸き匙また霞板とて笏の形して先を三  
絃の掄の如く薄く作りたるもの大小二ツあり画かく具  
ともふり盆ハ桐木を用ひ塗たるハわろし入砂ハ粘りを盆ハ  
此見砂を扁額の画き湯氣ハ掛てへは其砂と乾めし時ハ盆ハ其師ハ落  
児ハ如ハ子ハ傳ハ歎ハくハ此ハのハわハづハハハいとハ近ハ世ハよりハ始ハまハれハるハあハらハへ  
又細砂を染て五色ふあし蠟小漬したるを水上小浮へ画

をかく是ハ唯小児の翫ひふり又近頃物もらひら砂を手  
小握りて地上小書画をかくものあり是も安永の頃あり  
しと見えて胴脈り針の供養といふ草子小砂を摺り蒔き  
て字をかく法師ありといへり  
按小物もらひの砂画ハ昔よりふれあり今も浅草公園  
中へ出て、画くものあり過く頃一老婆の巧く小画  
くを見たり



